俳風

柳多留

巽編

へ9
1147
48

48

門へ 9特
號 1147
卷 48

宮城縣立図書館

柳亥海四十九編

花白会古川伊世を辞して坂
旧連和留子沼を訪てをうん
ちりしよりに新を東下よおよ
紹氏道さへんこすに付よ好人
テウ源春雨暁古の六子編撰と
再建の俳を始めよ古今の
好人を高く中興を図る

始めくをかんなりこれや世よ
大江戸の町の姫へこゝのつ
ゝ　四へなんこ百を
歳も代の さ人を葬祖仏
孫うゝ

文化十子春

山橋評

千歳の貞万代不易なり
お茶の水弁よ花ざかりあび
湯原の紹鷗ハ子へねまぎり俗
三韓の迎美再ちし山へある
執権のうまゝハ生涯で百んぶ
ふゝら雀（ちよつゝくと鳴ぐ）
糸計ぐ石をき煙りをつぎ
親ハ子よ切んでゝある 俗の稚

赤乐
遠茶
古弓
硯文
尾合
カヲウ
水鏡
松曉

[illegible]ん枝いねさきたが云ひつの
急測よおごる十日のうん[illegible]
文金で千あり芳めの[illegible]のうち
歩ひぐ四く少庵小撰よるハあれど
格ハ堺ハ[illegible]なよ　おし
源左協眉を[illegible]めかが要とあり
ちよ弦をつく　[illegible]のうへを[illegible]
少びさちよ一枝のつとめ三歩程
枝トちる枝で紀子よみ　[illegible]

仲九　山与　有幸　芳人　カヤウ　尾合　魚石　芳人　金亭

仲四年九月一

[illegible]　[illegible]　[illegible]　佃　合　合　柳鶴　寿山　三之縁　多佑　赤育　奏交

[illegible]の[illegible]り　[illegible]
[illegible]を[illegible]る[illegible]
[illegible]ハ義[illegible]
[illegible]吉野[illegible]
義[illegible]の武者ハ五月に[illegible]
[illegible]肌を[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]柳[illegible]川
[illegible]

猿猴も猿よつんとすまして猿が桜　水治
子哉をだちとまる浅腹隅田川　十九
篠原人白髪を黒く洗ふなり　白水
庄桐の肝饅頭をあんの薬なり　一支
北條が時分天下は塩釜持ヶ　風松
いろは武者並くちが好見越え　奥有
細見をゆるし奥の揃れされ　水治
実鰹る和書き　錦ヶ劍　佃
八幡を夜揚ちがれ武の内　筵雞

妹ハ拝やでほんハつきやなり　斗丸
切れさ新するハなまらぬ娘なり　矢正
時ハもたれど地の理よハ宝迷ヒ　三ツ下
神やどるかゝしべ秋ハ狐なり　河揚
割る時ハまづ三ッ組へ三をかけ　古鳥
鯨の行方へ手帛いれてなり　雪李
ふすでまく見月しくと男が立ち　鳳合
女房ハ乳ぶさあしての下云なり　三ツ下
うちくんた集諸ぞる丹相の門　花荘

ちやくの屋ハ三月の末ハ
毒記きうごくト者る中ず日
吹方のやうよませるちぶこ幸
朝晩の寒ハ冬の様でしらき
書の義ハ寒ハ秋様をさるる様
年者ハ方のきげんのかぶも方
京様ハ四者かくんぶ子ゆん与
お毒の名ハ子様(カンシャウバリヤ)莫邪(バクヤ)ちり
年ぶがさすつておこすかく八様

杯丹
五色
マイ火
兎ト
的丁
里花
梅油
赤乐
竹花

午月十九ノ三

[illegible]のくハ九月(セイモノ)がかきりちり
結のとこをえんせなこ様できかり
方べりのうのハ様の元岩三
良京をこッ指でるる玉ある
鹿の毛をぬくハ流れのかつハく
あうてハ方遠のちへの蓮美
ちぶでもの弱をつひちぶ
浅瀬ハ月の子ようれ中ムケ
真やハひげをむうテ毒ヲ毒

新宿
山与
港様
柳原
古粘
有幸
山与
市風
カヲ与

挿挟るふさをするものもあるべしと
戸障の建ちぬ日がけん　矢正
温石まもりろうつくらへ　半下

梳声評

毒虫の大樹ハ松まちふめうう　柳橋
戸附板ハまいてもみ見たもあるこ　草麦
三韓へ立きち方のかりもづこ　里稿
第ト侍りで長板やへ十二毎　志九
物星への使者ハ身をもちたまあり　矢正

分上の拍とも志ちる祝の松　志九
ありうれる世戸の近ハ多も近　一本
老後の天二家を泉を指へり　畦反
役引き八移同で雪を丈へ切　松山
できたまつかねぬ流づがやうほへ　来元
附よりねで至人も登まれ　尾合
海又ト代ノ毒田へ多を川の　南風
らりくとこ多へ松の始をけく　仝
代るのが二丁代千ぐ　五丁　柳橋

白鳳梅の皮をも止めよさせ　京鞍
山吹の枝でつぎさし行　權末　布袋
子孫者の祈ひ祈理も七五三　川柳
きて祈ひ祈剛と晴為て　尾合
付もよませ為も候せよ　志丸
月上げ為ぐ上ゲさげ　松柏
平飯をこなはしさのでゑがよこれ　柳五
剛がげハ手場祭りでよんさ為　里梅
府いさのハ金うへさのハ梅うへ

卯月九日

たんすかう上ものさたが風が吹き　水流
流し鉢を上をはじめたてまつる　克々
をばのあきれくよ来てこまふ為　中丸
主のかごを上に接さ松鶴ち　柳五
政左よりうちが有てまがをめ　洲梅
石柏子とつぐもかるい有り　里梅
扶ふけての受ハメりのたしよ祭り　川柳
矢大臣にけり矢負の幕をお　鉢柏
こつの風吉吹ト鉢ねけをいろ時　カヲ

大門の花は陰更のなまこ　馬精
田の蛙化し〳〵多井へのぞる　里花
うたし塀でぶぎる門土手の石　井蛙
ぶぎる中を同れて乞の名が暮り　南風
うろ〳〵さ糸指ぶる丹樹の紋　竹花
大笠は持ちちなるねぶ新屋　門柳
あぶちくも汁イよ毋敷拒ぶり　克々
毋敷のさまろくおこすかしは俳　竹花
山い寺の寄りぶ淺を翁イ〳〵　半下

井〳〵恵はぶるやもあるさ見せ　竹花
庫かへりの自由よちなるぬ三ッ寄へ　子素
逢作り寄つとうなぶて吸作る　古雪
風風は三寄で寄寄は寄ぶ見　而笑
はねへかるへぶで陣子ぶいろぶ　カニ丸
菜の茶は陽山次はぶぶの蛙　門柳
本姫の陰ぶのびて茶が咲き　鼠文
茨木の城よ行るぶ乞げそる　水境
一ろぶ亡逆姫を心のぶぶへ　五遊

耳塚へあがるのおさゝ竹をへ
ぬ八ゝ八ゝ八ゝ八ゝ八ゝ八ゝ八ゝ
赤ほとゝぎす名ばかりなれど子のげんを
云ふ人ぞ引きづり不孝をかくほうき
物いらぬ言イ利を嘆く鳥 人金
嘆りへハ言トを云ふ世の中の者
物中より切くゞ婦人ハハトよげ
大仏ぞ云ふ人の如ある所為ハ
水仙至一ぶいらうこたゝけ 赤

広得
古粒
撥袖
寸成
情を
赤生
地内
赤采
岩精

中里九十七

年〻町より立ツ投川の高尺
つきるハかけを地ゑ近てゆき
湯ごのさんむやくゝの笑ひ尺
ちやくゝの笑ハ三里の海苔
粒ゑハやくゝの千メで五寸ゑり
松浦深男なゝ木よりる不ロ
川柳評
沖糸れロ九で三十六里ゑり
勅鈴よ鹿のかゝ拉家の山

畦尺
柳ゑ
銀石
杯舟
二銘
西ゑ
論ゑ
志メ

を人ぞ尊さ私よりかぎりなく大濤
四百余里の海路を帝ト子房云イ
百官の形よりも門名をのこし
法師いとくひ人よりてはやまへ
一つ驅の欲でハ事伯夷叔齊
七ナ夜と月寒かくごとてせち捕れ
まイ海路を山よつむ毒がへや
あづらひの雲よ志てはゝ十五日
ちようらひをかさねて荘子同ラ笑

半下
松花
香炉
ヲイ
一本
赤色
ヲイ
海色
松暁

九代目のうろこ形ゝでも恨ゝ
ちゑ矢ゝるあハかしのぞゝよされ
ゑ三月キ体ニ毛てゝ毛てく極の地
法あり」を志て法ハ石あがり
マアぐゝの志ハ毒ゝてなゝひろゝ
志ろゝてきゝえでゝ油をゝゝ
ハをよひぶ行ゝて桜の法ヲする
桜 華 桜ニテ志ぎれゝんむゝ
まゝ月ゝ毒ゝ志ゝ法をゝろてゝ

松山
山ゝ
菊者
ゝ
毒且
岳石
橋袖
山頂
岩橋

若むしゝさ香炉よりは八尾ちり　矢正
旅から程ちさの物いくじなき　志丸
淺づくいるくまゝさのでゝ滅一　振袖
和尚坊主よりたつて日ゝ石どこすべ　山ち
おさをへの使ハ月ちゝもとある　矢正
六十八月秋はあで百ゝゝゝ　浴雪
なでらるゝ中ゝ人づるゝ太ん　克々
故のすねを姫のゝ手むごいる。　水流
碑ちハ光陰の矢の射かん　星曙

をの笠あはは提と桐塙しちち　柳亥
人先へいのきゝ弟をのりこまも　柳多
つゝのはむられ管摂ハすゝ　志丸
ちこんれいちの秋ち高ち茶ヲひき　一斗
掛ちぐまふちをすちるもあぐこそ　亦正
ち高の先ハ干ち美邪　ちり　仝
つゝあてま安屋ハ雑をえちテろへ　有章
かるちさ泊ぞつトちめちとさいちく　柳亥
ちるをゞつく氣吳ニャつうちまき　杜間

祇園祭を小一里世界の村の姿
涙汗の形れをもとめやき
茗荷ばかりハ紫ぶナト附平さ見
目を驚はして五テ石の柳京
玄帰の日れおでおまるみいろ
むねうちを皿をこ戸にて梅ハよげ
挑灯ハ屋をもとうて漫画を
ちを矢をるあハかしのゆうよされ
ものやハ鮮をむもろて氣をそぎ

矢正
木葉
柳舟
志丸
古色
乗浦
[redacted]
山ちう
カテウ

甲板ハさすが米屋の名不
正茶の小井ま花ぶしとりあぶ
ゆよ江戸ま市ようを京が有り
技術や生測をあ有ハ人のけに
お通ハ小町ハおのくそれ老い
豆かぶで豆を麦てしる姫姫
命がけ百雲を一人りまよい
帆立貝大神の中で破毋ち
ばのあきれぐまよそこまふ

歌文
庵茶
古粒
柳舟
里男
尾合
松柏
尾合
中丸

メくりいろ〳〵ハさこ田ぶかいのに
あの山のゆうよ大をする義国士
あぶなくもこれいよ毎乱づきたなり
ちゑおんの門はもたいこ拍子づいる
村お入りえ祖やくろよりおされ
仲ゑのハニイ仲かすハ五イ
こてをよくきゝなと三をおさげ
一向かまハず鯛鯉ヲ毒よのも
弥末のゆうよ桜門トへ下

酒光
松柏
山兎
里勇
力丸
柳精
古色
異山
丸

随て書俊とよゑバ史キとが光
鯨ゑ拔ゑさのあいてなさ
非在若牙よゞ右ろくの西庫を会
子ゑ頃を登ゑ三ゑ也ハむこい祝
光ゑを元りや毒山のおけさん
いきゑた登ゑさゆいニ数馬ゑ
硬とえてていゑ色のゑ〳〵ゑ
宮弄ある茨后ゑまが二入りのり
疑ゑのゆうまきゑるでセゑ

京猴
志九
河揚
井畑
雄文
楽住
鈴色
門寄
カヲウ

月上げ西ゲを寄下げ引りする
つきうるハかけを地ゑよ近てひき
有江かくうんのあさせる和漢歌
謡の為ものいれ序よ皿をなあ
為二人りかげまお場よ歌をうけ
うんざやう祝をのせてハ子をちろ
瓢をバ利ろうて歌をぶんまさを
立場で大坪流よ乳母ハ宗ふり
佐原ハ二度古々先よ仰けられ

志丸
柳雪
鶴亀
赤乗
尾合
古粘
砂文
松少
井蓮

中年九月十一

椿油坪

はん者りさ江戸地来ほづ
能あ丈江筆の紙よ遣たまひ
井の巻れ小判の紙を序な成
同の下々よ帆をかけて来ん
月の為ハ別もてうとせの義
旭の祝礼義ハひふぬすぐなり
矢のこちくちく徳近ちよなり
滝云のたねよ日ゲの語をんせ

雨夕
古粘
キ名
柳雪
仝
里越
五文
河楊

はふかつてゐるのハおかつ汁り　乗浦
春平の修羅四びを切髪を切り　赤ト
所々のかねで嵐をそゆるしく　婦　縫
紅葉はでかるをあしてを四山　茅麦
こみせんが琴のおこりのたどめ　志多
相のまのゐるまハげびさふ〜迷　如雀
樂洲の世ハをを横ハおし　鳥山
非仏凡夫ト他しておを名ハ非　丹成
文道ハまつきを拔ゐるゐる　斗九

柳早九十二

梅子がちるとまつまもすくなり
乃中難波の町の名よのこう
を立りねれるきぬの花〜さ
おきつふいの書にてあるふ猪ま
たま相へまぐみごもらねおを上ケ
彦金ゐる語金の古代よあ来
ゐの曲ゐてゐうえてごしいや〜
紫の垣根の糸ハ十六里
神老で生きをやくまぐパ

酒造
門柳
井蛙
木炭
鍵杖
柳
如石
十六
垂ま

尾のかづハ九郎源出へいくゝやげ　　酒光
ゆいをいつつハ老金ト書こあるを　　ホシ
賀の餅を獨も張こ蓋てゝ　　カテウ
酒白くおぢる丹を沢の五毎一　　五表
井村ゞ身ハ丹を沓をもぐやゝし　　綾丸
ゐりえへつくゞこしまの物なり　　ホ葉
古くても通りのよいハ混ぎゝる　　一本
仲乘いれもながれるとこへきゞ　　ま下
呈吉ゞすると岡の川岸をゆへ　　ホ沢

呈吉ゞすると岡の川岸をゆへ　　毛道
かなだゝいゐて沓人花ゆかゞ　　不光
夏こ酒利で名上吹ケハこび　　ふ弓
修城のあゐりこのみハ梅ゞゆり　　井子
吉ちなゐ身ハ祝なく成ると酒ケ　　古色
祝祝ををけて長子拵牙ゝ蒙　　柳色
肩へ巣をかける八左イゆかゝ　　三郎
口ゐゐゝなるこ移ゝ毛下ゆもあし　　無色
ゑさんハかる尾ちち嘉なり　　シイト
滝つきの名ゝ拵物ゆもひつき　　酒光

家ヵ下よりおしゑるの伯池の茶や　箕山
登メよ東洲三室ハ来ゞなし　桃林
子のものハ祝のわゞよ姫こまり　三鈴
不姫よせつたのかねゞ吾をかし　古雪
ものゝハさんざ乃ゝ已花世庵ん　平丸
名桜さ本樹よ可れる所ゝゞん　河楊

撫声評

千代迄も考る源氏の紋　生舎　里梅
ゝん者ゝさ重よ他香の茶を乞ゝ　青嵐

仲呈九十七

三韓の耳へ日本の茶ゞを入
家のゝの不二ゝ湾の海てお弟
文の乃学べハ孝の乃ゝ和れ
故しゝゝれの表へゝんでゆキ
什系で六十帳をつゞるゝゝ
情ゝへ気ハ気加よのゝる風を史
重をゝりねれる言葉の形しさ
ゝゝゝの懐よまゝへゝ重の者
姫の教礼義ハいゝぬすがゝん

松山
斗丸
ゆゝ
本系
玄嶽
河楊
井海
林舟
里梅

おりをなくをつたりと云ふ気　草麦
かんざしで何すさく髪を姉が名へ　如石
鳳凰の中から反哺の孝も有り　赤楽
つまる短尺ハあてゝ　年と雲　桃林
散る紅葉もちらぬ事新田山　条路
桜より武のいちハ稲の茎　木葉
神風の外を筆はまる吉田松　柳多
手の語松井の有る一里塚　シツト
田と橋でかかり遊ぶ木の上ま　松雅
秋の田を一枚下女へ嫁入づり　葉虫

まがるたまハ上手はみる女　千崖
娘の手でうるのハ熊ハねまりぐす　柳多
めでたさハ盆子急税を店通し　諸芳
すき刈る鎌三ヶ月のえへかられ　若松
読く筋子のちゞ刺子四だんせず　芦後
たらう母運橋子しても同し事　一徳
業識かゞ春雨子咲く人生の笛　井子
わんどくをかへしてえの諸で来ん　佇庭
茶の咲く皿で金有人もある　香史

けいせいのつまり老も梅が香り　仲子
切れみよみれんぐくも返事　千雀
五ちよ老イで親のまのまり　乙浦
夫伯のひくいさ紅ばかんぐ　柘植
掛の本のすよはげしさふ八色　松雀
鳥より三声やいがもうとぐく　東子
横よ梅るきすもやごはじき八雑西　雨且
級日更硯ノ海を庫がのく　其笠
とんざいく肩尾ざと門へかへられば　紅紅

犬のホカで紙のできるカ紙信　紙雪
まがってもまがってね知ハまりがね　連指
乃ふ志人書よつ引る寄りなし　一声
元世の戸をとたんこかろす大坂や　玉九
ふて〳〵る土乃で信をひよぐくせる　千雀
九そふぶい紙な信を赤トへかけ　柳雪
乳のく子のカで為る巴ろん松　柳及
ふき自在茶荷を歌ハむまくな　月成
大ふも病乳の附ハ昭よ炭り　芝麦

いあねぬ振袖を長さあげつき　袖紅
まいらくでろくそく義をつませ　柳色
関食もするよ本兵いくぬごと　糸巻
ころれよきたよセッや縄をかけ　五友
つくま端あるまかして屋ゲろれ　一本
古今の命小所計り八宮ゲをし　河場
おしいる小町女来　ろ一　拍　木乗
下女のみ義のもとハぬしたる　カラウ
かねつきの名よ捨的八忘しつき　西光

如夢なるとは重下女も掃
きへかるる比相の木を拾かくまり
ませるつくあつて半蔵より下女ひとま
長かけの塵ハおいどの上へを寄と

川柳評

御上路不二よ入れをせぬ計り　山板
分身よむしもしきに里ぼる　斗丸
清利運でかるたらの笑ハ拍角　計人
紀ゝゝを古先利反中乃丸ゲん　河場
玉縄を三里の獄とつらじ　云イ　也雀

世間ばなしや俗をうけてきものを酒と
肴とする嘉酒なる人ものをとらしむ
ぬる貸米田ぐんあり多つぶ
世外寄へかゝる高てはををちくち
新子塔で寄人もあらくまかはる
宇宙の天皇を推京三年ゝがり
後朋世意ゆあを長子懐世し
横ぶ寄ぶこあるゝかり止び
一十眼であぶなへ和を笑ふる
あゝゝくへぶ外なれ敵ゝ家ゝ

カ高
酒楊
赤乐
乐及
興元
一徳
雅徳
シクト
振曲
志水

世寄寄近之祖八素の来ゝり
山の麓をのがれ迫千よじろ長る
相づち八いなり山ゝふ嶮かよ成
のゝゝ千ゝ年ゝ寄ゝ切ゝ来ゝ
帝ゝよ実盛長を立くすふを
芽寄代変八千西の伸ゝる入
故のゆゝよ始やゝちいぶゝ
いゝ国に ゝこぶ至黄ひよ
ちゝよ直ゝよ八だち至拓

青嶺
山横
熊石
伊迫
玄嶺
キ名
柳迫
志九
有家

毎年ハ二月ノ十八　山柳
ありそなくらのうら　茅麦
田の中ヵよ居れハ鶴ハ鳴ころう　門柳
えせの子をとたんとはたた大なや　玉丸
云ばケよ鶴やハすとし高を交　百矢
九ちうぐひ程なる鶴を門ハへうけ　柳多
代立ぶやをだもこまいを張ちう　一徳
生碎な牡たがハすつりをちう　ら成
かまくらふ吉よかハらなまりぶ　柳多
酒たくハ為て遊人ハと上り　不見

年四十九ノ十九

焼香の大法よ出る等代だく
仏城のゑくハ仏せをのかぶる
やみじやハてうまん程ぶこうかり
人の子を吸かくやくまかりてら
食の法島の世度廣よ英人へ
茶地ハ立すぼんでハ居るひくき
鶴の為ち富上ぶがぶつてメ
おしろくおちる産ハ五毎一
今日体ミ小使をしてかへり

赤子　赤子
相国　相国
毎且　毎且
柳毎　柳毎
霞霞　霞霞
遊竹　遊竹
赤乐　赤乐
茅麦　茅麦
赤乐　赤乐

ゑざりハごちゝの秘とちぼ〳〵たる
長かけの場ハかいどの上を海と
ころどして倉ふハ粮祝又なり
山の神いんぐ地蔵のおでぁい
をまだためのきりぐ大事こゝ用ゑイ
ふんどゞで名をさしたハひん学去
むつ云ハハ弘なりと月なりと
たくても真りのしくハ祝きたる
あうり至ゆ事一紙ゆうんよえ

有幸
京服
田舎
歯花
志水
一張
市風
一斧
祝祝

田舎いまやヒをなげてハちで逃
きゝく〳〵よしみつのゆも不安毒ぢ
梅大を至ゑしよくえれハ大要さん
倉メよ菊江こまり米がなし
松ち品道ハ石道やもえなり
ぢ〳〵い小小町かゑ一柏
不孝去ちい子ぢげちかとあんぐさを
よがちちづ色ハ九及紀護の函
みす事で小云ねぐてちあう

赤乐
立左
布东
栃林
汁九
赤乐
山猫
名柳
市飞

河楊評

身の定産をなしてはいる　如雀
云よ殆身よい虎の浦在城　志九
非風よ吹ち第の墨ほ張　雨夕
泡で沽をつれば解で舟を流　遙乎
浦利をハ金づくでなたば牧　尾光
三歩金東江流の舟ちり　有幸
切がさきハ金さりがさき坂を走り　雨且
大よりぐるのを方つけて水に入り　亦乗

三拍子をろつる島子門トよちす　庭花
まよい島子たいこハ有ちが金がな　雨且
二八寸の香ぐ二つ水まどろせる　赤生
井村へ高をかりあす流ちき　杯舟
祝芋の皮を女房あつくむま　柳乎
ま云云の物で他家もぐるやとを　半下
井おとりの附ふ吹と云丈平氣　尾光
鶴の百ひろくなれるをとめ　亦乗
張よ金氣が有ツて水へ向キ　好程

蒲沢の亀大ふまき〳〵ひなり　　所笑
紙ゑずこ子ゑずずさつさ作こ　　雑
さつてやをこくをまりて下ゆねつぎ　　柳雨
金毛識九旅あちへ姐妃しゆ　　雨且
通例の甘命ようれね大ゑも　　梅油
三ケ月いでき時のまちんこ　　竹子
鄙の仰んでも汚ゑ〳〵陽ゑ〳〵　　毬石
吉田町ゑくちのやうよ乳ゆやも　　仝
大ゑゑゑ門で留をふまき　　糸道

こゑびれ者すにしのゑんこ猫ゆけ　　古粘
大ゑも風で俵をのんぐる　　山柳
ゑゑぶんすゑぶゑうちゆア喰めし　　弥彦
ひあゑで下ゆ身鉈をやみされ　　カテウ
金中さん十ゑゑ点ぶきゑた　　仝
ちんぐ〳〵どく氣をゆしみず死ニ　　朱椒
御云をふまく紙の去耳テシ　　芝友
五のこ逗人をゑ〳〵へりやちつゑ　　カテウ
椒の義ハ変ておひでよてゑゑず　　杯弁

世話やの長い指さきでかんがへる
酒さ酒を次の世話でテンポよ
切れ出し入れいれいれざつうまれず
網屋うりかしをまず紙らうへ
考ひさ柄杓のたねぬ版をたき
木の櫛のやうで血氣の強こまり
糸清の四まつり居さろろ
同じ業のうでえんへる苦ったば
かなひませねまでいきり三不相成り

新狂
如雀
竹子
里曽
志丸
山名
木葉
矢正
美人

世話やへ線濃死がいをうりさし
かこち新よしやつこいよ月のうち
粘弁慶でもあるよりやつも相撲
東色のうち直肩と衛へ入れ
世話いたらも名やの婦人
今燒ハ髭切り下世ハ撥ガ抜け

瓶声評

神經仏髭も二種の国宝
世辞でも化粧をせざる玉石

金亭
馬也
赤乗
乗浦
斗丸
可笑

岩鏡
海棠

徳よ入る門の戸てくるを待子　弧文
三者の為徳二歩世界なり　花道
月こ合始為相はめ〜〜祝　桃林
安徳の道接しまの道ハなし　竹子
味五月接へのゆ弓其の境　其堂
聊ちゝず其為よ生れ身ヲ導　巴也
目前為すぎすで徳筆ハ生れる　春朝
為せこへゆゆ老こなる場の系　井蛙
人日ハ皆拾子よく用をさまし　赤系

身自を識すを為接の為徳
ちゝ義のちなちゝ巴なり　カ子門
西住の詩五尸の雲よ入り　弧文
表系の吳ハも毋ハ七三毋し　河楊
切がゝきハ金去りかゝ拾を考　仝
八丈の結を海なき法で似也　雨且
禁討の世ハ田の時でつかゝ合　柳雪
九徳を考ゝ一毋毋鶯ゞ鳴き　春朝
接よ金氣ゞあるでゆへむき　市谷
弧程

一昭二さきく五百万石と云イ
為邊で諸山極ハ女房と之
龍の作り手りの所門なり
老宿山老さ汙を帆で掛し
拙ケ弟といへたびんと成て居る
古イ女の出きびんを売る　女
寛中元十五年さんがきなんした
掛ハ呼吸の出意よて石ま成り
掛の業共去ハ為て出ま成り

門柳
真豆
松山
花屋
吉女
赤乗
カニ乃
酒播
吉ト

充安の為絵細元を行かへ
十二文ま入ゝねどま月八時斗之
かゝす掛こめでゝ作ハすとめ之
酒で汚を洗れハ嫁で高を流ゝ
実人が死ねと琴をぶつこハ
出さより掛ナで松の名ゞ
やゝかま出四へ太の仮名まへ
ナゝ亟琴ゝ毎簪糸をかけ
内松ゝの巻ハ待ま〻でゝんゞつる

赤乗
斗九
酒播
海老
赤生
竹子
真豆
里梅
松程

荷でハたかくなかれ切れ　　里雀
挑灯の色あさなを十寸穂ん　　河楊
屋つかうのふより愛人のふがきれず　　志久
行ねきハ級形行ハ鼠へつけ　　花乃
江戸町のあで仕るふもくさき　　本葉
御くらも星えをえて医者ハ逸ち　　カヂウ
石臼ハ凍あるきかも支婦づれ　　裏柳
けいとおいたんすもふぶ拵バせる　　山柳
祝ゑすす子さくびまさ浮ちり　　鶯

海山ハ乗やへそさくかつぎ迄　　麻花
やハらかな吉が河の名をゑゑ　　志久
けん金のわころびをきこのお鞘袋　　羊下
新よ夫ををゆて婦ゑまくず　　如雀
狗の犬がをへて洞ぶにへこばれ　　多人
八帝ハつよらり九帝弱いち　　一徳
一女で六まの時名ゑまぶぶ金　　カヂウ
知れねたづ毒町金へ麻布イ　　仝
八級や白きをえれハ級ぞ文る　　河楊

古瓦やへ旅寐死がいをうり見た
嘯くろう屋を借んでは立よりて
立ハ五毎乙のうへよりおく　みが
正立のかりべよりかるき湯をつり
摂津のぢんまりろたて屋でいる
ゑへねへ世帯扶弁流で泣き
湯屋さん歯医へ古ぶが付き初々
十歳ぢんの泊通より別れる史子へ泣
木の根のやうて無血氣の俳こまり

全亭
カニヤ
河橋
松暁
柳雨
瀧多
市風
尾光
三知

雑録ハ人をうえへ毛氣づき　全亭

川柳評

斗九
柳雨
ヨウ
水泉
シント
一徳
山樓

乗ひい瓶うつハ作りへ貧以ち
海の自紙入よして法新上
鮫かさよつ川立上り十三里
お茶〳〵と五ナ三ぢハ浜イてる
九竜子武者の小路ハをごなハず
六京の鉄よ小松のなうりせバ
城なゝでちを松よ不見ん

六月の花で六月ばかりせる
事ハ千年の小棚の故也今
迄くゝよ咲ハ白梅子
実紅やハ太義陽ごのハ不太ん
井ゐうきゝる砌紅ハ掃て煮り
文塗より書賢ゐるさゐハ楽おとれ
ゐのまさかさまよ浮をゐる松が岳
からこ紅よてやつをいふ身のゐ
紙袋ハ鬢と名恵とを入れて立

赤生
十六
杯舟
木葉
書史
愚石
南風
弓也
義後

中宮九三八

昼ゆゑよ海ぞえぬみを照後を
書毒から紅ゐ紅ゐ紅てゐゐを三紅ゐ
古井戸へ入宝をすゐ宝ごとけ
書毒ゐの高かねて扶ちを見ゐ
業のかゐハ行義をよくすてゐ
ゐ相ゐの表ハ猪さうでかんがゐ
花鶏ハ一足変ゐよ一荷黄イ
八王の紅ハのゐふす成り上り
美よ北見れ扶よみ十二潮

カゐり
柳毛
紅紅
紙毛
志夕
紅紅
如雀
十六
紅紅

あの擂磨鉢ちやゝしかゝぬ　杯舟
志あんへて春てか酒よ又のまれ　不見
古い世のひきだんを入ら　女　木乘
編笠を持へたさひ横山　淀乘
虫ハ五あ色のうへよ虫くゝ母べ　河橋
根葉のある枝へ根葉の汀をうち　柳乘
萩黄六十以上　十五　以下　淀乘
狗の犬ゴリヨウギを入て洞ゴとゴれ　手人
十有五よりてかゝへねでゐざし　山横

酒で竹を作れバ候で寄を作
八ツ乳よて母をやしちい逆又ん　酒乘
賞ちのんぶ志ゝ子子有ち　手人
初年ハめやすかるべき一紅ん　振袖
大嵐大風かゞで着を毎し　河橋
ゐかゝでむゝひこまうい磨ちり　義後
後山ハ乘やへそゝうかつき逆　毒石
菊の主活和当抜元て涙つゝへ　産乘
涙ちりも豆元をゝんていま弟ハ逆　カテウ
　　仝

乗逗人ハ俗笠でのつさ〳〵
塩ヨ合事ヶ有るでハ〳〵白キ
すゝき後ハ長子ゐるけさを拭
こハ版の礼ヨ婦ハ赤面し
むなこゝをうなぎの尾つゝむこ
鍋豆うかしを其手紙ヶ〳〵へ
よわくと瓶を新し姪を乗り
古但屋の教ヶ細工ヨ伯母うぢき
外科いきゝの尾うよんゝ乗ゝ

花乃　新紙
新紙　三枝
三枝　尾光
尾光　庵家
庵家　里勇
里勇　林舟
林舟　里勇
新紙

嵐木戸祝ハさきつゝ尾うよあら
居子をゝゝるの大嘉毎ヨ志うず
変初メヨみゝずの尾うよゝを左手
目ゝゝ尾葉を白ゝへて志ゝ乗ゝ
方所の場目迫を俗ひ大あゝび
木の猪の尾うで血氣の俗こまり
祢ゝと町市ゝ町の俗ッへゝ
変きりの俗こ尾ふゝゐれゝし
ゝゝ俗ねゝかひハ白ゝ粘を挽キ

新紙　不完
柳園　其笠
柳雨　山水
尾光　花乃
無石

けらなる事既御前様よりかせとして　桔梗
春毛さんはいやだよと下女ども　太賀
あんらんへ下女ときつけ志かれる　春安
賀の餅　はなぞてうらんでつくづく　遊花
四ツ目やうる麻よ糸をつけさせる　柳多

裏柳評

図絵の附かく古人よりよくまいり
まして秋迄の作の二文　桔
梗の毋ちくきぐんの桔をとり
笑の餅　千年を経る松の白
六はふの美人新日ゆるとさめ
夢でさへ花はかくべつ杉月雪
志田第三へて毛日は茶うすゝ
祝よ似ぬ子はつめいぐ　尾

馬康
赤子
山桔
東猴
里松
川柳
斗丸
若松

唐人の詩云日本の山を出る
島よりさる蚕のまぶも桑の葉
猶くれる江かくんの駄ぶき
軍配をひつかへす　浮屠子
至の秋こころがけてゆく久米賀子
かきの一をゑでやて一歩信一
江戸傑の位を京でもゑて西
陽の条ハ巳年より
雲のうへなの御まく馬く傑メ

柳多
河楊
古粘
柳多
茅麦
ちゑ成
糸好
里雀
柳多

鶴飼ハ極秘を神より伝受ス
月見よハひさうな松も邪広な成り
遊客て下ゆすをまくの遊づス
おゝ客の数を含するいゝ者さ
秋の条けいせい先拍て彩り
八彩ののきたけつるお汁ア象
池の茶や一口はちすとちぎるス
事欠とりしろ考えてこ役ス
東屋がなくあるなよせさい者ス

加丈
畦道
門柳
井陣
門柳
ち橋
尾合
山橋
弥多

土の金延長の遊かく賣始め　里松
海川の岸へ一里をさけ　町　与成
二十六ちかくあてねいなくふい　河揚
京声よりれ大ぶへのりこと　赤乐
市屋のこと事をふくつぶ　赤賀
男女家近こされ　徳ノち　邵交
おはへハりしよりハ　三軒
かつく　外ハ老人ハ　赤乐
美濃京の素真茶かて

八幡ハ西垂ちてぢんまよりり
大門の間へ作つかつぎ迄
木橋の治つれぬと治が　東脇
百人ハ云茶もかけぬ茶のこと　清光
矣ぎりといつて女房よ　糸屋
汁ケ茶と且粉ケ茶といつぶ　糸屋
ちまぎれとりてこれハちぶ　茅麦
ちへぬきの女房按茶の相でぶ　彩粉
地主隠かりて常畑ひめてあり　尾光
　　マイ少
　　洲香

ありそでをかつひで弟を小さなる　里梅
はへんとするをすなこ作のちへ　未子
ひよめき人一あのこちたげんぶく　其笠
四つとしのれんであ書ぼ里等　可知
忘れ代の今戦宮法池より有り　若松
一枚のあて系あり寅お来　諸兵
　　瓶声評
赤人ハおぶく柿の下より立ち　弟人
形らうを歩でへらんざるハほし　梅林

[illegible]より所形より附の星ハ浅し　清丸
紅紅の梅附平より成る所家　カ子
大江山一人りていつさかりの日うり　秋花
弟てさ人指別花ハ形月言　門柳
梅つゝむ弟を活を高人毛弟人　柳多
庵ちてうけとる嵐のハ百里　斗丸
梯梁へながれ矢の弟ハ岩蓮　竹子
雲の上なの嵐迎弟くるめ　柳志
屋ゑぐこりさあ船弟殺弟捷　和雀

つくりてもこがね茶碗所望ら
摺り鉢摘を拵へ入れ
夫婦ら下駄ま米やハ立信楽き
長火を置て前にて鍋鍋拵ものあぐ
近以大き鳥屋の門ハ三のすどし
立中へ大盛物を出すてくれき
山吹こしらえ紅葉を あしてか
ら鶴ま冊ハ有てるあ
大壺を引けもかまんまれてるあ

一頃
中丸
柳多
西光
赤采
古粘
門柳
涙多
門柳

油屋の師匠めさてとうとうい
業焼の屋敷行を業つけら
温泉ら居ねと坊ま刻るみ
一通て沼ら波の神ら
手へ人の家よかなるばよけい有
秋きねこ用ハ元へねざあぶれ
光秀ぶ沼ハ二日の天の時
撞花ら拵拵ハ二日よけへ
とあ不口家元ハ元へまいの

志水
沼揚
ゆら
三郎
マイ火
兩且
シノト
尾合
シノト

一ケまへより其松はまつかご
海ゝ所こゝんでゐやの日はなかりの
唐詩ろけんこもゝいよ祝又ゆき
梅は測て一度歌をかゝき
淺草て恵方を梅へらんてゝ
市ゝ多き高子四月をつてゝ
二丁所せゝいの版を畫て
菊い美ゝ来将や二季ヒを高
ちゝ直ちゝ千ムゝ多ゝ

新酒
山猫
小雀
新酒
和水
梅又
光々
赤采
半下

桜ひ桜かゝの孫をやゝゝ春
他ゝへハゝゝねゝゝゝ角なぜに
ゝゝゝいのかりいろはを始メ
風の子ゝ来てふいごをゝやゝ
前ゝちゝのゝハ梅柳ゝんぜん
貧ゝをゝゝ家ゝ入かゝの云ゝ
主ゝの逆ゝ二人りでゝゝゝ
ゝまくゝへひゝゝめハ百ゝ一里ゆけ

五所
門雪
山馬
カテウ
松山
其笠
雨且
竹園
里勇

一つかゝ田舟はでありる七ッ浦　柳雪
沙燈を出度かまらゝ山よすゝ　逸鹿
于ゑのがねれますなどでも精ハ法　和山
獨かーの一人り角力を見てゝり　柳雪
下ゝは將棋ゆるてかゝゝ二歩ゝれ　東好
出のゝを石でゝて一歩かゝー　与成
印ゝよも若林のあるけちを使　有幸
子印よあのちちよ大もとつさんゝ　雨夕
二月五日いねおきん門あよー　愚石

なよ板へそゝ場をつゝかゞやきゆ　如雀
七ころび月よハそとはへけつまぢき　志丸
おいゝんの芝を借へなすこられ　竹子
芝も咲分よなる亀の子ゝ舎　若松
ひきなひなるの方をつゝ作こ　里雪
物でゝりたゞる姫ハ志れ下地　赤賀
生義酒屋逸よすゝ風の神　可笑
おもしろくなへのハ風の引ッゝ　門柳
板まへゞよくて坂安鎖ゝり合　画克

地ぬりの鉢ハ奴のげのべ哉　凌丸
蕪くらをうまてば是ぞ迄てる　矢正
祝言の歌ハ信者でも嫌をつき　庭花
あくいとしいハざこ森の家ぢり　門柳
大久保ハ元の位をかりさぢり哉　松山

川柳評

日月の一揆とて表のうへ　里雀
秋ぞハすてをいとせぬ苏子切　門柳
名月のてる弁義はすまさ程　孫兵

うすすりこ哉ハ二十一日月　汁丸
ひょくれんりハ平人のちとてほ　赤子
まそひきがすひとかなてる梅花の曲　マイタ
虎の威を三ぬ孫ようにところ　庭花
孫やハね樽をさとる哉　矢正
一丁岩巴豆芝清ておつらぶ　河楊
我王ハ哉くくも味ち　里勇
細南ハ祢代ぢて男の子　お猿
石山ハ伊勢を一下日ようる哉　里勇

奈良の名所さくらなのを法隆寺
かすみとそさハ下和ゞ月かねん
四屋山海ものすうもちつばね
ヿケ月のでそあれ高遠えそろ
伊勢平治なぜおこつさうびせね
すゝたきハ下たきはいて三度
高ゆしゝ豆ハ接ぎのできへそる
ものかゝあそんでてあゞ十五あ
種貝二だんもんゝ毎月

三朝
馬鹿
本家
新千
尾合
遊庵
西光
お猿
門斎

ざりそも伊豆の板石ねがゝみ
たれる近ちイ　ヨ
ゆゝ四今ヨ二ちいちつ居す
茶坊主の次ゝふ田舞上り
高七ち和ち業平氣えん
結人孫ヨ松下へ高ゝ暮れ
ゆすえれバえへ枝を五ゝ梨名
吹ぶりの蛇の目ゆゝまを居す
特ち多ハいやと似ちの高ゝ

カヽ戸
半下
門斎
集名
尾光
乾四
竹子
カヽ戸
本家

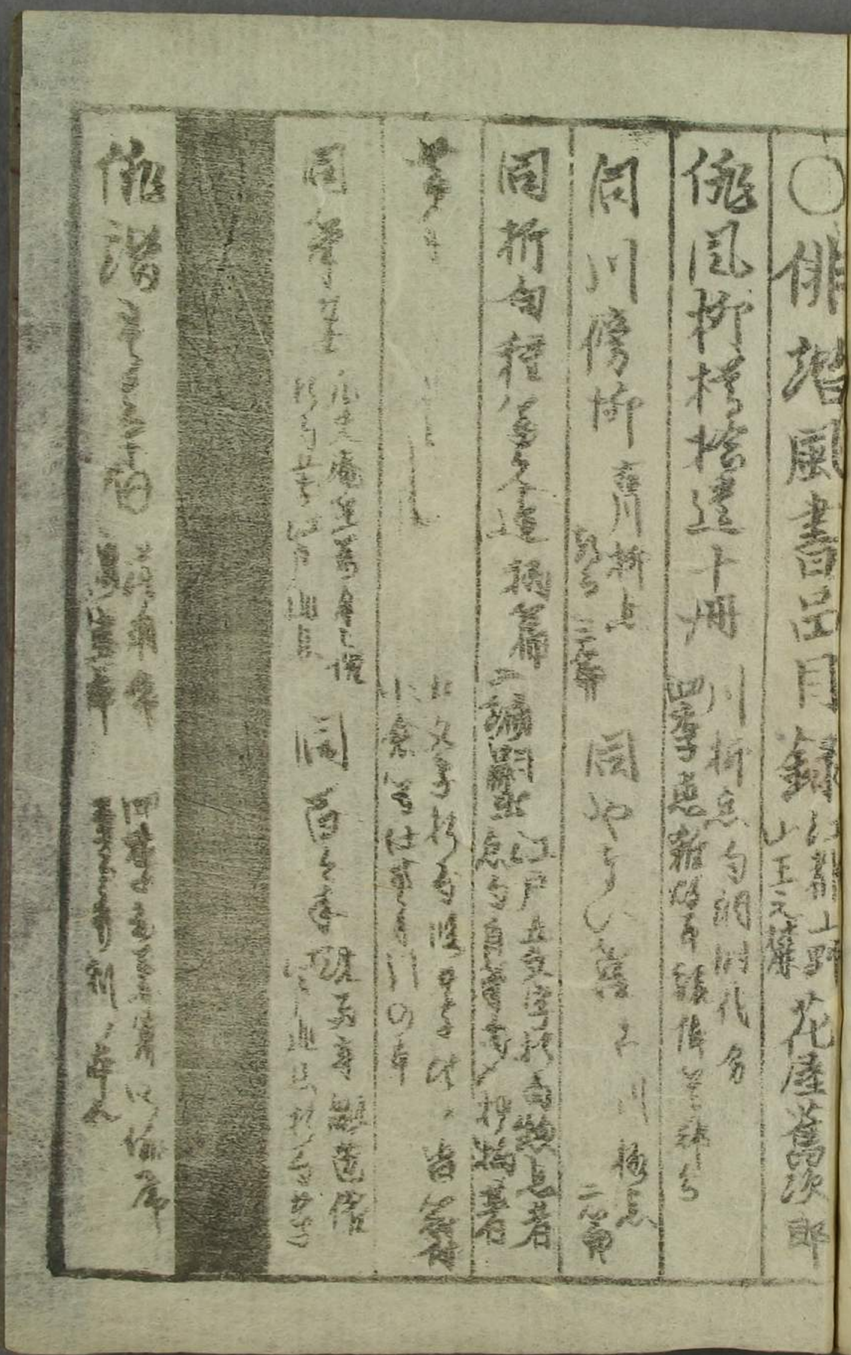
かつらを知人にてるをつけ　　弼程
六尊月をてゝ人を拵を入れ　　マイタ
あ弟の弓を的よ去て立キ　　志丸
巻ちらの居を仁にうや的よかけ　　柳弓
方絵よ遊しかうやくなこを愛　　有幸
ひきなゝたるの弓をつてる　　里勇
江戸の去中ねれ物を子供ゝ　　山橋
ちゝふやハ一見を能よ仕あり　　本賀
いすゝのうつハや今の弓吳やゝ　　矢正

御四十九ノ四十

端いうけ呈一ハ所けいゝ　　山橋
月ゝゝで芋やたん子ゝを付、　　集弓
敷いゝやゝ茶縁や二事ゝ七を出げ　　赤乐
下毛書の上茶ゝんびの爪ゝい　　竹子
なまゝゝよ鳥子ハ焼よ成てかう　　里梅
子よハふけ幸ゝをやゝゝ形世幸　　山橋
いんゝゝゝけん昂よ紙文ゝキ　　鄭雀
ト物ゝ石コハ茶ゝんゝめゝゝ　　ミノト
十五毎なゝゝ出郷ハ玉を物ハ　　カニウ

未百少のお六をきりのいく女　斗九
ちゑうと思へ人を材の源れ勇者　五友
紅かり色こつきあつのかくぐり　里梅
端日祇代二百三へ〳〵　カテウ
横太へ者ゞ角てぶんまける　五遊
一ツ代を半めとおて良とかゆ　岩積
主五尺代さて減者のじ　柳多
人新ゞ者稼を和者ゞ　吉古
ぶれんごろ石ゞ也なとちの俳をき　カテウ

地ゞの毎ハ奴のけつへあり　清九
如度の毎者日なしなくふまれ　カテウ
者の屋〳〵下女ハ角〳〵ぶんまえ　ち成
者ゞ声よわれ大ぶへのゆりを　赤乐
つんぶうハ石れ付て門へすち　乐浦
者の屋を者ゞなを人者ゞ五　可笑
又者ゞ〳〵不如ゞちつぷ　古粘
たゞゞ者入りゞ又ながれ〳〵　亀石
石男を生ぶりとち麻者を　乐浦

入月 [illegible] 屋 西光
[illegible] 水至吹さかなつくで 赤乐
杉の[illegible]へ雪の[illegible]のうらうら 路貞
三世相見れバおらばの後 赤乐

俳風柳多留 毎四十九篇 柳四十九篇